老舎「陽光」について

吉　川　榮　一

一、はじめに

抗日戦争末期の1944年、老舎は「習作二十年」と題する文章において自己の文業を回顧しているが、それは次のように結ばれている。

> 今年は私の創作の学習の二十年目に当たる。量の上では私は二十冊余りの本を書いたにすぎず、質の上では立派な作品は一篇としてない……。[1]

二十年の創作活動をこう締めくくるこの短い文章全体が、実は自作品を貶めた言葉に満ち満ちている。

> 『大明湖』以降、私は４つの長篇――『猫城記』、『離婚』、『牛天賜伝』と『駱駝祥子』を書いた。そのうち、『駱駝祥子』と『離婚』はまだ取るべきところがあるが、『牛天賜伝』は可もなく不可もなしだし、『猫城記』はどうしようもない。……中略……生活の不安定や体の不調のせいもあり、抗戦後に書いた小説は少なく、短篇集は『火車集』と『貧血集』だけ、長篇はわずかに『火葬』のみであり、いずれも出来は良くない。
>
> 戯曲は少なからず書いたが、さまになっているものは一つもない。……中略……『残霧』は（戯曲）第一作だが、めちゃくちゃ。……中略……『張自忠』、『大地竜蛇』、『帰去来兮』は全てまれにみるひどさ。[2]

こんな調子で自作を語る中で、短篇小説については次のように書いている。

『大明湖』が燃えた後、上海の文芸出版物からの原稿の求めが次第に多くなった。しかし、その都度長篇を渡すこともできないので、試みに短篇を書いてみた。短篇は長篇よりも数多く書いたが、短時間に習熟できるものではなく、私の最初の短篇集『趕集』に収められたものの多くは、滑稽話とスケッチであり、これを小説と称するのは実に無理がある。

……中略……

『趕集』のあと、『櫻海集』と『蛤藻集』を出した。この二つの短篇集にはそれぞれ一編は多少さまになっているものがあるが、しかし多くはやはり数合わせの作品であった。私は短篇を書くことには長じてはいないのだ。(3)

短篇小説の成果についても否定的な見方を崩してはいないが、注目すべきは、「この二つの短篇集にはそれぞれ一編は多少さまになっているものがある」という老舎の言葉である。彼の言う「多少さまになっている（稍象様子的）」作品とは、「月牙儿」（『櫻海集』）と「断魂槍」（『蛤藻集』）に相違あるまい。控えめながらも老舎が自作について肯定的な評価を下しているのは極めて珍しい。前掲の「習作二十年」からもわかるとおり、老舎が自分の作品について語るとき、多くの場合他者からの批判をそのまま受け入れ、自分の作品は欠点ばかりの取るに足りないものであるかのように振る舞うのが常だからである。彼の創作経験を語った『老牛破車』に収められた多くの文章は、そのほとんどがそうした卑下とも自己韜晦とも取れる調子で貫かれている。

私は二三の小説を発表した後、真に力強い文章――たとえそれがユーモア小説であろうと――とは余計なことをたくさん言うことにあるのではないと悟った。とは言え、実際にはまだこの悪い癖をすっかり取り去ることはできていない。創作とはなんと難しいものよ。私はまだ練習中だと言うばかりである。(4)

『猫城記』は、私自身の見るところ、失敗作である。この作品は、私が

いかに凡庸な頭脳の持ち主であるかを情け容赦なく暴露している。[5]

十万字前後のものを六、七冊書いて、私はようやく技巧と抑制の何たるかがわかった。しかし、技巧と抑制があれば文芸を偉大たらしむるとは限らない。『離婚』には技巧があり抑制がある。しかし、偉大とはまだほど遠い！文芸とはまことに容易ならざるものだ。[6]

例を挙げればきりがないほど、老舎は自己の作品の欠点を自ら承認し、嫌味なまでに自己の能力を低く低く評価するのである。それゆえ、その老舎が「多少さまになっている」と評価しているのは、彼がその二作に余程の自信を持っていたということを意味している。とりわけ「月牙儿」については、老舎自身会心の作であったようであり、別の文章の中でも、「今となってみれば、『月牙儿』があれば『大明湖』はいらない」[7]とまで言い切っている。事実、「月牙儿」は老舎の代表的短篇（中篇）小説として高い評価を与えられ、例えば老舎とほぼ同時代に作家活動を開始した巴金などは、老舎不朽の名作として、長篇小説『駱駝祥子』、戯曲『茶館』とともにこの「月牙儿」の名を挙げている。[8]「月牙儿」はすでに老舎代表作としての不動の地位を確立していると言えるだろう。

ところが、「月牙儿」の翌月に発表された姉妹編である短篇小説「陽光」は、これまで全く顧みられることなく看過されてきている。老舎自身が「もし『月牙儿』がなければ『陽光』だってなかなかのものだと思われる」[9]と珍しく肯定的な評価を与えているにもかかわらずである。本稿では、老舎の短篇小説開眼の契機となったこの「月牙儿」の陰に隠れてこれまでほとんど着目されてこなかった「陽光」にむしろスポットを当てて分析を行い、コインの両面のようなこの二作品の持つ意味を探っていきたいと考えている。「陽光」のもつ意味を解き明かすことで、「月牙儿」の位置づけや老舎の意図がより鮮明に浮かび上がってくるはずだからである。[10]

二、「陽光」の構成

「陽光」は、1935年5月発行の《文学》第4巻第5号に一括掲載された。一

方の「月牙儿」は、同じ年の４月１日発行《国聞周報》第12巻第12期に連載が始まり、４月15日発行の第14期まで三回に分けて掲載されている。[11]同年８月には他の八作品とともに老舎の第二短篇集『櫻海集』（人間書屋）に収載された。[12]「月牙儿」が43章、「陽光」が49章と、章立てに若干の違いはあるものの、二作品とも短い章節を連ねて書かれており、その体裁は同一である。分量的にも、手元の『櫻海集』初版本に徴すると、「月牙儿」が47ページ、「陽光」が49ページと、ほぼ同様であることがわかる。

「月牙儿」についてはすでに翻訳もあり、日本でも広く知られているので紹介を省くが、これまで紹介されることのなかった「陽光」については、やや詳しくその内容を見ていきたい。「月牙儿」が貧しい一女性の独白であったように、本作品も全編が金持ちの家に生まれた一人の女性「私（我）」の独白として綴られている。

「私」は両親にとってはただ一人の娘、兄弟にとっては唯一の妹として、家族みんなからちやほやされ甘やかされて育つ。学校でもいつも自己中心的に行動し、勉強などまるでしなかったが、常に女生徒集団の一方の首領として多くの同級生を服従させ気ままに振る舞っていた。

高校時代が彼女の黄金時代だった。つきまとってくる男子学生がいることを誇らしくは思ったが、相手にはしなかった。上級生になると、野放図さはやや影を潜め、「私は誇り高く、理想も高く、もし私が誰かの物になるとしたら、その男性はきっと世にもまれな美男子であり、私を天上にまで導いてくれるだろうと密かに想像していた。」

成長とともに、彼女は家族の様々な不行跡に眉をひそめながらも、見て見ぬ振りを装わねばならなかった。父も兄も金で女を買い、よその女性を台無しにしながら、自分の家の女性たる「私」には、彼らのために体面を保たせようとしていることに気付いた。彼女は家の中に目を向けると暗然とした。

家の中で囁かれる結婚話は彼女を不安にさせた。結婚は早すぎるし、結婚するとしても自分で理想的な英雄を捜したいと考えたのである。その一方、もし嫁に行くなら相手は金持ちでなければならないと思い、金持ちの若奥様になっ

た自分を想像して陶然とするのだった。

しかし、結婚前に人を驚かせるような何かロマンティックな経験がしたいと彼女は焦りを感じた。そんなとき、同級生の結婚式で見かけた男性に少し心動かされた。彼も自分に気があるようだ。初めて自分の香気を送り出し、新たな境地を見出したことが彼女にはうれしかった。けれども、彼女は、訪ねてきたその男性をにべもなく拒絶する。自分は高みに立つ女神であり、崇拝は許しても手を触れることは許さないと思うのだった。彼女はますます大胆になり、平気で男性と映画や食事に出掛けたり贈り物をもらったりするようになった。男性にだまされたりして泣いている同級生を、「私は愛の海辺で泳いでいるのに、彼女たちはその中に目を閉じて飛び込んでいるのだ」と見下していた。

大学に進学した彼女は、高校時代の男友達とは全て交際を絶った。大学のクィーンとなったからには皇帝をこそ自分の恋人にしなければならないと彼女は心に決めた。彼女は新しい男友達を手玉に取り、以前にもまして驕慢になったが、その一方で、恋愛の喜びとは無縁の自分に空虚さをも感じた。味気ない毎日に飽きて彼女は同級生の男友達を誘って同級生たちと争ったりしてみたが、同級生たちの恨みを買うばかりで、自分自身は何の刺激も感じなかった。

やがて家族は彼女の結婚話をまとめた。家の言いなりになって結婚したのでは同級生たちにも軽蔑されてしまうと彼女は反抗するが、これまで自分の言いなりだった家族は、こと結婚に関してはあくまで頑強だった。小事は自分に決めさせたが、大事は親たちに決定権があるのだと思い知らされ、彼女は自分が思っていたほど大切な存在ではないと気づく。思い悩んだすえ、彼女は遂に折れた。新しい女性の地位を維持するにも金がいる、これからも自分は陽光の下にあり続けなければと思ったからだ。

結婚相手は裕福な道徳家だった。結婚後の生活に彼女は有頂天になった。夫の栄光のお陰で、何処へ行っても人も羨む立派な若奥様として扱われ、ちやほやされる。しかしそれもつかの間、一人になると空しさ寂しさを感ずるようになり、声望ある人物の夫が何故自分と結婚したのだろうと訝しく思うようになった。自分の家柄が夫に相応しいからには違いないが、夫だって自分の学生時代の浮き名を知らないはずがないのに……。夫は太陽のように彼女に光を与え

てくれるが、教師か保護者のようではあっても、夫ではないようだった。

彼女の幸福感は薄れていき、単なる「夫」ではなく「男性」が必要なのだと考えるようになっていった。彼女は学生時代のようなロマンスを再現したかった。夫よりも身分が高い男性と幸福の絶頂を極めたいと願った。ほどなく、荒削りでハンサムな地位の高い男性と彼女は激しい恋に落ちた。彼女はその男性との恋に夢中になり、初めて愛の喜びを感じた。だが、彼女は自分の不倫が仕組まれたものだったことを知る。彼女の愛人の「引き」で夫は出世したのだ。

夫が品物のように自分を差し出したことは許せなかったが、彼女は愛人との悦楽を捨て去ることはできなかった。ままよ、これからは自由奔放に生きてやろうと彼女は決めた。彼女はあちこちに愛人を持つようになり、艶聞が広く知られるようになっても、相変わらず夫は道徳家然とし、人々は夫を尊敬し彼女を羨むのであった。金と地位さえあればこの世は何をしても構わないのだと彼女は改めて感じていた。

しかし、夫が妾を囲うにいたって、自分がすでに夫の出世の唯一の道具ではないことを知り、彼女は不安になった。その女がもっと地位の高い男とくっつけられれば、自分は用済みになってしまう。自分の力の小ささを彼女は思い知らされた。悪いことは重なり、一番大切な愛人が彼女を棄てた。身分・地位・愛情・金・幸福、全て自分のものだったはずなのに、いまその全てが指の隙間から滑り落ちていく。悪運を払いのけようと、彼女が昔の男友達の一人と付き合い始めたところ、それを知った夫は激怒した。上流社会内部での出鱈目は許されても、下層の男性との交際は夫の顔に泥を塗ることになるからであった。

自由を奪われ家の中に閉じこめられた彼女は、逃げ出そうにも、使用人なしでは食事ひとつできない我が身の不甲斐なさを嘆くばかりであった。ついに夫との離婚を決意するが、離婚話が世間に知られるや道徳家としての夫の世評はたちまち地に落ち、夫の後ろ盾だったかつての彼女の愛人も手のひらを返したように冷淡になった。彼女の実家も彼女とは縁を切り、離婚訴訟が終わってみると、夫婦の財産はもう幾らも残っていなかった。彼女は全てを失ってしまったのである。

さて、この物語全体を鳥瞰してみたとき、私たちはまず老舎の巧妙な作品構成に気付く。

幼いころの自分を春の陽射しの下で紅く輝く牡丹に自らなぞらえていた彼女は、やがて十四五歳の頃には「鮮やかな花」となり、さらに高学年になると「熱帯樹のようにいつも花を咲かせ、一年中が春のようだ」と感じる。しかし、父や兄たちの醜悪な姿を知り、「あたかも黄昏の中にいるように、白日でもなければ暗夜でもない」ような思いにとらわれる。結婚話を押しつけられると、「私の太陽は光を失い、たちまち天地が真っ暗になってしまった」が、いざ結婚してみると、「自分は春爛漫の山、夫は降り注ぐ太陽」と陽光の再来を喜ぶ。だが、次第に気持ちが冷めてくると「小さな黒雲が太陽に掛かった」ように感じ、愛人との不倫に走る。これまで経験したことのない激しい恋に身を焼く彼女は、「全世界が紅い花のように見える」ほど、あたかも夕焼けのように赤々と輝くが、離婚騒動で全てを失った彼女は「太陽はもう自分を照らさなくなった」「明日の太陽の光を失った」と嘆くのである。

花と陽光がキーワードとして巧みに利用されているのは指摘するまでもないが、幼年時代を回想する第一章の次の一節を見落とすわけにはいかない。

> 時には少しばかりの愁いもあったが、それは朝焼けのようなものに過ぎず、太陽の光そのものほどの鮮やかさはないにしても、やはり赤々と輝いていた。(13)

すなわち、小説冒頭に「朝焼け（原文：早霞)」という言葉が配されていることから分かるように、この作品全体が太陽の運行のように進行し、彼女の一生は一日の変化になぞらえられているのである。光り輝く朝日に照らされていたが、やがて太陽は西に傾き、日没前の目映いばかりの夕照もつかの間、ついには太陽はすっかり没していく。そして、陽光のない夜に彼女ができることといえば、「ただ過去の栄光を回想するばかり」（最終章）なのである。

この点で、「月牙儿」は「陽光」と大きく異なっている。「それは様々に異なった感情と様々に異なった情景とともにあり、じっと腰を下ろしてそれを眺めて

いると、一つ一つの私の記憶の中の碧空に斜めにかかっている」[14]とあるように、「月牙儿」中にたびたび描かれている三日月は、時にはかすかな希望であったり、やるせない孤独感だったり、或いは自分と母の儚い一生を暗示する存在であったりする。主人公のその時々の心象と深く結びついており、常に主人公とともにある。[15]しかし、「陽光」中の太陽はただ主人公を照らすだけであり、彼女は時に「私自身が明るく暖かい小さな太陽であり、自ら光を発している」（第一章）と錯覚してはいるが、現実の彼女は太陽に翻弄される存在にすぎず、日が昇り沈んでいくことをどうすることもできないのである。

三、循環する物語

「陽光」のもうひとつの構成上の重要な特色は、「月牙儿」同様、「陽光」もまた循環する構成をとっていることである。最終章の「これからの私はただ過去の栄光を回想するばかりだ。私は明日の陽光を失ってしまった！」という主人公の最後の言葉は、第一章の「幼いころを思い出してみると、艶やかな赤い花びらと金色の蕊をもつ大輪の牡丹が春の陽光の下で花開いている様子を私は思い浮かべる。」という書き出しへと返っていく構造を持っている。[16]これはちょうど「月牙儿」の最終章において、「私はここで私の友――三日月をまた目にした。ずいぶん長いこと三日月を見ていなかった。お母さんはどうしているだろう。私はこれまでのあれこれを思い起こした。」という獄中の主人公の言葉が、書き出しの「そうだ、私はまた三日月を見た。……一陣の夕風が眠りにつこうとする花を吹き醒ますように、三日月は私の記憶を呼び醒ます。」へと循環していく構造と全く同一である。[17]

このような独白形式の回想体の小説と言えば、『駱駝祥子』の姉妹編ともいうべき中篇小説『我這一輩子（私の一生）』をすぐ想起させる。中篇というより長篇小説に近いこの作品もまた徹底した独白体ではあるが、『我這一輩子』は「陽光」や「月牙儿」のような循環するスタイルをとってはいない。老舎が、この「月牙儿」と「陽光」の二作を敢えて意図的に「同工異曲」の姉妹作として世に送り出したのにはそれ相応の理由がある。すなわち、循環する作品世界を提示することで、貧しい女性であれ金持ちの女性であれ、女性の運命は一つ

ところをぐるぐる回転しているだけで、その運命の輪から抜け出そうといくらもがいてみても、結局は堂々巡りをしているに過ぎないことを読者に強く訴えかけるためである。あたかも無間地獄に落ちたかのように、循環するこの苦しみの輪から逃れるすべはないのだ。「月牙儿」の主人公は貧しさゆえに早い段階でそれを悟り、「陽光」の主人公はうわべの豊かさに眩惑されて気付くのが遅かっただけの違いである。作者のこうした意図は、この二作品のもう一つの共通点からも窺い知ることができる。

「月牙儿」の登場人物は、「私」「お母さん」「お父さん」「新しいお父さん」「同級生」「校長」「若い男」「若い妻」「女給」「小順」「客」「支配人」「ごろつき」「警官」「お役人」などであり、主人公の「私」が勤めた小料理屋のボーイらしき人物である「小順」のみが固有名詞を有しているが、あとの登場人物は全て名前を持たず社会的な役割を示す一般名詞で語られている。「小順」にしても、先輩女給の言葉の中に現れるだけで、実際には登場していない。また場所についても、「町」「墓場」「学校」「監獄」などと一般名詞で語られているだけで、固有名詞を一切排している。

一方「陽光」の方も、「私」「父母」「兄」「教師」「同級生」「用務員」「花婿の付き添い」「男友達」「夫」「身分の高い人」「使用人」「弁護士」などと表現されるだけで、全ての登場人物が名前を持たない。この点では「月牙儿」以上に徹底して固有名詞を排している。場所についても「学校」「大学」「寮」「ダンスホール」「植物園」などと表記されるのみであり、これまた特定の都市や地点を読者に感じさせる表現を慎重に避けている。これは何を意味しているのだろうか。孫鈞政は老舎の他の作品について論ずるなかでこう述べている。

> 老舎の小説中の主人公の名前は、大抵が老張、老李、老趙、小趙などであり、苗字があるだけで名前がない。これは一つには手間を省くためであるが、いま一つには「概括性」を持たせるためである。[16]

確かに老舎の多くの作品群には漠然とした名前を与えられた登場人物が多く、孫氏の指摘は注目に値する。老舎が「月牙儿」と「陽光」において、固有名詞

を他の作品にもまして徹底して排したのは、この二つの物語で語られる二人の女性の運命が特殊なものではなく、普遍的なものであることを読者に強く印象づけたかったからにほかならない。貧富に関わらず、全ての女性の一生が社会から抑圧されたものであり、しかも彼女たちはループを描き続けるばかりで決して運命の輪から抜け出せないことを、老舎は訴えたかったのである。だからこそ、表現が多少窮屈に感じられる箇所があっても、徹頭徹尾固有名詞を排して作品世界を構築しようとしたのである。では、彼女たちをそうさせているものは何なのか。それこそが"陽光"である。

"陽光"とは確かに"太陽の光"という意味を持ち、小説「陽光」の中に頻出する"陽光"という言葉は全てこの意味で用いられている。しかし一方、周知のごとく"陽"とは"陰"に対するものであり、太陽が"陽"であり月は"陰"とされるように、男は"陽"、女は"陰"であると古来考えられてきたのである。したがって、"陽光"とは"陽気の光"であり、"陰気"に対する"陽の気の光"にほかならない。元来この"陽気"とは万物の生長や明るさ・暖かさなどを支配する存在ではあるが、彼女たちが生きた社会においては男性こそが"陽"の気の源なのであった。つまり、小説「陽光」は、"陽"（男性原理）に支配された社会において、意識するか否かに関わらず"陽の気の光"の降り注ぐ中で生きていかざるを得ない女性の姿を描き出しているのである。そしてさらに言うなら、二つの作品において、この"陽"の発する"気"とは金であり、男性中心社会を支える所謂「道徳」なのである。男性中心の経済構造・男性中心の倫理道徳にがんじがらめにされた女性こそが「陽光」の主人公であり、「月牙儿」の主人公であると言えよう。そもそも三日月（月牙儿）とは、太陽（"陽"）の光を斜めからほんの僅かだけ受けた存在であることを忘れてはなるまい。

「陽光」において、主人公はしばしば自らを花に喩えているが、花が"陽光"（太陽の光）なしでは生きていけないように、彼女もまた"陽光"（経済力のある男性）なしには生きてはいけない。幼いころの彼女は確かに"陽光"に包まれていた。「毎日いい加減に日を送り、何の心配もなく、大きな熱帯樹のようにいつも花を咲かせ、一年中が春のようだった」（第9章）のは、金持ちの

父親がさらなる金を生む可能性のある娘を庇護していたからである。そして結婚後、「夫は陽光であり、私の上に降り注ぎ、私の頬の桃の花は陽光に笑いかけ、陽光は全て私一人のものだ」(第33章) とかりそめの幸福に酔っていられたのも、裕福な夫がいたからである。その両方から見捨てられてしまえば、彼女にはもはや何処からも"陽光"は降り注がないのである。

先に挙げた孫鈞政は老舎作品中の裕福な女性像について、次のように書いている。

> 現代文学史上、何人もの作家が封建的な大家庭に生まれた娘たちの運命を描いているが、それら女性たちの苦悶はどのような配偶者を選ぶかということであった。これに対し、老舎の描き出した若い女性の形象の多くは足のある生きた商品・債券のような存在としてであった。[19]

孫氏は、『老張的哲学』と『離婚』の二作品をその例として挙げているが、「陽光」中の主人公もまた、まさしく「生きた債券」として父親に利用され夫に利用される女性像の一人にほかならない。この事実を強調せんがために、老舎は敢えて主人公の夫を「きわめて身分の高い、きわめて財産の多い、きわめて立派な、しかもきわめて道徳的な人物」であり、「事業も新しく、思想も新しいが、古い道徳を守り続けようとする」「二十世紀の孔孟」[20]として設定したのである。すなわち、"陽"の原理の体現者であり、"陽"の理想と称すべき人物を夫として設定することにより、"陽"の支配する社会では、女性をどう利用しようと許されるのだという事実を、よりいっそう強烈に読者に突きつけたのである。主人公のこうした運命を暗示するかのような老舎の次の表現が印象的である。

> 私は凧だわ。高々と春の空に浮かび、みんなが私のことを仰ぎ見ているけれど、私はただゆらゆら揺れ動いていさえすればいい。春風の中で遊んでいればいいのよ。私の上も下も右も左も陽光に包まれているわ。[21]

確かに彼女は陽光に包まれて少女時代を過ごし、陽光輝く結婚生活を迎えた。しかし、自由に大空で遊んでいるように見える凧は、一本の糸でしっかりと地上に繋がれているのだ。他人に操られてはじめて大空に上がることができる凧は、糸が切られてしまえれば地上に落下するよりほかないのである。彼女のように。

四、「陽光」と「月牙儿」

老舎は、ロンドン滞在中の1926年に『老張的哲学』で文壇に登場して以来、27年『趙子曰』、29年『二馬』と、つづけさまに長篇小説を発表し、1930年の帰国後も、『小坡的生日』（1931年発表）、『猫城記』（1932年発表）と長篇小説を発表しつづけている。そんな老舎にとって、1933年から1935年の三年間は一つの転機と言って良い。短篇小説の豊収期とも言うべき時期がこの三年間だからである。1933年には12編、34年には10編、35年には14編もの短篇小説を彼は発表している。その後、36年には6編、37年には5編、38年3編と次第に数を減じ、日中戦争の激化とともに抗日運動がらみの散文などの執筆量が圧倒的な分量を占めていき、短篇小説はほとんど姿を消してしまう。[22]

もとより、1933年以前にも老舎は短篇小説を書いてはいるが、1923年に習作「小鈴儿」を発表したあとは、[23] 1929年に「旅行」、1931年に「五九」、「討論」のわずか三編を発表しているにすぎない。[24] しかも、これらの作品の発表誌はいずれも大学内の刊行物などであり、多くの読者の目に触れるものではなかったし、老舎自身これらが一種の「埋め草」にすぎかったことを認めている。[25] そんな老舎がにわかに数多くの短篇小説を書くようになったのは、状況に迫られてのことであった。「一・二八（1932年の上海事変を指す――筆者注）以降になって、私は短篇を書かなければだめだと思った。なぜなら新しい出版物が多くなって、みんなが原稿を求めてきたが、短篇の方が当然都合が良かったからだ。」[26]

老舎は「我怎様写短篇小説」において、彼がそれまでに書いてきた短篇小説を三つのグループに分けている。彼の言う第一グループは、第一短篇集『趕集』に収められた「五九」「熱包子」「愛的小鬼」「同盟」「馬褲先生」「抱孫」の6編であり、これらを書いた頃、彼は「まだ多少短篇を見下しており、短篇は書

くに値しないと考え」「気ままに面白い話を書いたものが短篇だと心の中で思っていた」[27]。

第二グループは、「大悲寺外」以下、『趕集』及び第二短篇集『櫻海集』に収められた16編である。[28]第二グループについて老舎は、手っ取り早く原稿料を稼ぐためと友人の求めに応じるためにこれらの短篇を書いたのだと韜晦めいた物言いをし、「まじめに取り組んで書いたものの、まだいくらか短篇を軽視しており、自分の本領は長篇を書くことにあると考えていた」と記している。[29]

第三グループが、「月牙儿」「陽光」「断魂槍」「新時代的旧悲劇」などの作品群であり、「一つの現実、一つの自覚がこれらの作品を別のグループにさせた」、「第三グループに到って、私の態度は変わった」と老舎は言う。少し長くなるが、老舎の言葉を引いてみよう。

> 現実に迫られ私は長篇の題材で短篇を書かざるを得なかった。現実とはこうである。原稿を求められることが多いものの、題材はそれほど都合良くあらわれず、かくして胸中に暖めてきた長篇の題材を取り出して急を救うことになる。言うまでもなく、こうした卸売りを小売りにするようなことはつらいことではあった。しかし、十万字分の題材を五千字の短篇――「断魂槍」のような――に書き上げるにいたって、つらい気持ちが自覚へと変化した。経験こそは貴重なものだ。自覚とはこういうことである。長篇の題材で短篇を書くのは決して損ではない。なぜならたっぷり十数万字は書ける事実の中から一部分を取り出そうとすれば、当然その中のもっとも優れた部分を取り上げることになるからだ。[30]

すなわち、長篇小説ともなりうる素材から煩瑣な部分を削ぎ取り、エッセンスのみを緊密に紡ぐという、短篇小説の新たな執筆姿勢を老舎が自覚的に取るようになったのがこの第三グループからなのである。上記の四作品とも、もともとは長篇小説の素材として老舎が胸に秘めていたものであり、就中「月牙儿」が長篇小説『大明湖』のハイライトとも言うべき部分を短篇小説に改編したものであることはよく知られている。残念ながら、『大明湖』は1932年1月28日

の日本軍による上海爆撃によって原稿そのものが焼失したため、今日両者を比較対照して分析することは不可能であるが、この「月牙儿」創作の経験から老舎が短篇小説に一つの手応えを感じ取ったことは間違いない。すでに引用した「今となってみれば、『月牙儿』があれば『大明湖』はいらない」とまで言い切る彼の言葉が、それを裏打ちしている。では、「陽光」はどうか。

> もし「月牙儿」がなければ、「陽光」もなかなかのものだと思われる。……中略……私の見るところ、「陽光」が「月牙儿」に及ばない原因はこうである。「月牙儿」は『大明湖』をもとに手を入れたため、首尾一貫しており、ぎこちなく不自然なところがない。一方「陽光」はと言えば、これもまた長篇の材料であったが、それほど長く胸の中で暖めていたわけではなかったため、長篇を短篇に書き改めるとは言うものの、実際にはそのときになって思いついたことを全て盛り込んでしまった。その結果、いかにもぎこちなく不自然に思われるものになってしまった。[31]

たしかに、「月牙儿」と比較するならば、「陽光」は登場人物に膨らみを欠き、いささか単調な箇所があることは認めざるを得ない。しかし、「陽光」が存在するがゆえに、「月牙儿」の世界はいっそうの深まりを持つと言えるのである。そのことは、二つの作品に描かれている男性像を比較して見れば明瞭になる。

> 女が少しでも自分をゆるめると男は匂いをかぎつけてやってくる。男の望むものは肉であり、男が与えてくれるものもまた肉である。……中略……あのとき私は春風に身を任せ、あの人のなすがままになっていたが、あとになって考えれば、あの人は私の無知を利用して、自分の快楽を貪っただけだった。彼の甘い言葉は私を夢見心地にさせたが、気が付いてみればそれは一場の夢、空しさに過ぎなかった。私が得たものは日々の食事と何枚かの服だけ。[32]

こう考えた「月牙儿」の主人公は、自分をもてあそんだその男に棄てられた

彼の妻との偶然の再会をきっかけに、「ロマンスが先で飢えを満たすのも、飢えを満たしてからロマンスにふけるのも、一つの輪と同じで何処から始めようと同じなのだ」[33]と娼婦への道を歩み出すわけである。ここに描かれている男性像は、女性を肉欲の対象としてのみ考えている存在である。これに対し、「陽光」中の男性たちは、貧しい境遇の女性をもてあそんだり、妾を持ったりする点では「月牙儿」と同様であるが（第12章）、単にそれにとどまらず、女性を蓄財や栄達の手段として利用しながら恬として恥じざる「道徳家」たちなのである。女性は肉欲の対象であるだけではなく、男性の欲望実現のための道具でもあることを老舎は見逃してはいなかったのだ。

男が金で女をもてあそんだり、僅かばかりの衣食と引き換えに自由を束縛したりするのは老舎の生きた社会だけにあったのではない。社会の底辺に追いやられた女性たちが春を鬻がざるを得ないのは悲惨の極みではあるが、敢えて言えば、それは「何処にでもある話」である。老舎自身、「月牙儿」のみならず、「微神」でも『駱駝祥子』でもそんな運命を生きざるを得なかった女性像を描いている。それは確かに社会の暗黒がしからしめた結果ではあるが、では陽光燦然と輝く上流社会に生きる女性たちはどうなのか。老舎の着眼の非凡はここにある。

下層の女性は日々の食事のために肉体一つを元手に男性社会のおこぼれで懸命に生きねばならぬが、上流と言われる女性たちは女性たちで、親に利用され夫に利用されて生きる以外に道がない現実を老舎は暴いているのである。「自分は美しく誰よりも聡明だ」という言葉が「陽光」の中で何度となく繰り返されているのも、いかに聡明であろうと、女が女である限り決してこの"陽光"を離れては生きていけないことを、いやがうえにも強調せんがためである。主人公がどれほど「愛」を夢想しようと、或いは自らを女神に擬そうと、彼女は所詮「一個の商品」に過ぎないのだ。その意味で、「月牙儿」に登場する裕福な若妻が「磁器で作った人形のようだ」と表現されていたのも由なきことではない。いかに美しくとも、人形は人にもてあそばれ、人に操られ、そして売買される存在でしかないからである。

魯迅は「狂人日記」において、「仁義道徳」の美名のもとで「人が人を食う」

社会を抉り出しているが、老舎は「月牙儿」と「陽光」の二つの作品を通して、「道徳」の虚名を振りかざして女性を「暖かく」包み込んでいる“陽光”の真実を老舎一流の表現で読者に突きつけているのである。

注

（1）老舎「習作二十年」；1944年4月17日重慶《大公報》。成都《華西日報》；4月20日《天地画刊》第2期、9月《抗戦文芸》第9巻第3，4期合刊に転載。『老舎文集』第15巻（人民文学出版社；1990年）530頁。

（2）同上。『老舎文集』第15巻；529～530頁。

（3）同上。『老舎文集』第15巻：529頁。

（4）「我怎様写『老張的哲学』」；原載《宇宙風》第一期、1935年。老舎『老牛破車』（人間書屋、1937年）所収。『老舎文集』第15巻：167頁。

（5）「我怎様写『猫城記』」；原載《宇宙風》第六期、1935年。『老牛破車』所収。『老舎文集』第15巻；187頁。

（6）「我怎様写『離婚』」；原載《宇宙風》第七期、1935年。『老牛破車』所収。『老舎文集』第15巻；193頁。

（7）「我怎様写短篇小説」；原載《宇宙風》第八期、1936年。『老牛破車』所収。『老舎文集』第15巻、198頁。

（8）「懐念老舎同志」；巴金『探索集』（生活・読書・新知三聯書店（香港）、1981年）17頁。

（9）「我怎様写短篇小説」；『老舎文集』第15巻、199頁。

（10）老舎が自ら肯定的評価を与えているいまひとつの作品である「断魂槍」については、すでに伊藤敬一氏が「『不伝』の世界」の中で見事に分析されており、参照されたい。伊藤敬一「老舎の世界」；東京大学教養部《外国語科紀要》第20巻第2号、1973年1月。

（11）張桂興編撰『老舎年譜』上冊（上海文芸出版社、1997年）138頁。

（12）「陽光」の引用については、『櫻海集』（人間書屋；1935年）に拠る。初出誌である《文学》第4巻第5号（1935年5月）に掲載されたものと異同はない。

（13）「陽光」第一章；『櫻海集』243頁。

（14）「月牙儿」第一章；『櫻海集』195頁。

（15）親切にしてくれた男性と初めて関係を持ったとき、彼女は「私は三日月を失い、自分自身を失ってしまった、お母さんと同じように。」と嘆いているが、この表現から逆に三日月と主人公の心理的な結びつきが強く感じられる。「月牙儿」第21章；『櫻海集』219頁。

（16）「陽光」最終章及び第一章；『櫻海集』291～2頁及び243頁。

（17）「月牙儿」最終章及び第一章；『櫻海集』241頁、195頁。

（18）孫鈞政『老舎的藝術世界』（北京十月文芸出版社、1992年）38頁。

（19）前掲、孫鈞政『老舎的藝術世界』37頁。

（20）「陽光」第32章；『櫻海集』273～4頁。

（21）「陽光」第10章；『櫻海集』252～3頁。

（22）老舎の著作については、張桂興編著『老舎資料考釈』（中国国際広播出版社、1998年7月）所収の「老舎著訳系年編目」を参照した。なお、『駱駝祥子』や『四世同堂』など彼の代表的長篇小説は、短篇小説のピークの後に現れている。

(23) 「小鈴儿」；〈南開季刊〉第二、三期合刊。
(24) 「旅行」；〈留英学報〉第3期。「五九」；〈斉魯月刊〉第2巻第1期。「討論」；〈斉魯月刊〉第2巻第2期。前掲「老舎著訳系年編目」参照。
(25) 例えば「小鈴儿」については、「私は南開中学で教えていた頃学校の刊行物に一篇の小説を発表したことがあったが、それは数あわせにすぎなかった。」(老舎「我怎様写『老張的哲学』」；『老舎文集』第15巻、164頁。)、「私の最初の短篇小説はまだ南開中学で教えていた頃書いたものだ。しかし、全くのところ学校の刊行物の編集者としてお茶を濁したようなもので、別段どういうつもりもなかった。」(老舎「我怎様写短篇小説」；『老舎文集』第15巻、194頁。) と述べている。また、「五九」についても、「〈斉魯月刊〉のために字数あわせをしたものだ。」(老舎「我怎様写短篇小説」；『老舎文集』第15巻、195頁。) と素っ気なく記すのみである。
(26) 「我怎様写短篇小説」；『老舎文集』第15巻、195頁。
(27) 「我怎様写短篇小説」：『老舎文集』第15巻、195頁。
(28) 老舎自身は挙げていないが、「開市大吉」を加えると17編になる。
(29) 「我怎様写短篇小説」；『老舎文集』第15巻、197頁。
(30) 「我怎様写短篇小説」；『老舎文集』第15巻、197～8頁。
(31) 「我怎様写短篇小説」；『老舎文集』第15巻、199頁。
(32) 「月牙儿」第28章：『櫻海集』225～6頁。
(33) 「月牙儿」第31章；『櫻海集』229頁。